

郷土の先人に学ぶ

OUR FOREFATHERS

沖縄の民権運動の先駆者「謝花昇」

謝花昇は1865年、東風平間切東風平村（現在の八重瀬町字東風平）の農家の長男として生まれました。幼少の頃から勉学を好んだ昇は、東風平小学校、沖縄師範学校で学んだあと、2代目の沖縄県令（現在の県知事）上杉茂憲が創設した留学制度により第1回県費留学生に選ばれ東京へ留学しました。

学習院や東京山林学校、帝国大学農科大学（現東京大学農学部）で優秀な成績を修めた謝花昇は、沖縄初の農学士となり27歳の時に帰郷しました。そして現在の国家公務員にあたる高等官技師として沖縄県庁に配属され、製糖法の改良や造林の指導、土地整理事業、農工銀行の設立などに携わりました。

しかし、そまやま 杣山（琉球王国時代から地元）の農民たちが共同管理・育成していた山林の開墾をめぐる、開墾による利益が役人や寄留商人など一部の者に独占されていることを知った謝花昇は、当時の県知事と対立し、県庁を退官しました。そして、仲間と政治団体「沖縄倶楽部」を結成し、機関誌

『沖縄時論』を発行して県政批判や県民の参政権獲得運動を展開しました。その後、様々な妨害にあい「沖縄倶楽部」は解散を余儀なくされ、志し半ばの44歳で病により短い生涯を閉じました。

謝花昇が亡くなってから4年後の1912年、沖縄で初めての衆議院議員選挙が実施され、ようやく県民の国政参加が実現しました。同選挙が全国で初めて実施されてから22年後のことでした。



東風平運動公園の高台に設置された銅像です。銅像までの道のりには謝花昇が病没した年齢と同じ44段の階段が続いています。実際に階段を数えてみてはいかがでしょうか。

謝花昇コーナー

八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館では、謝花昇の関連資料を常設展示しています。第1回県費留学生たちと撮影した写真や、学習院中学時代の成績表、県庁時代の写真まで、さまざまな資料から謝花昇の44年に及ぶ生涯を追い、その功績を学ぶことができます。



働く喜びを歌い、 社会奉仕を説く教訓歌「汗水節」

「汗水節」が誕生した昭和3年頃の沖繩は貧窮の真っ只中で、新天地を求め移民ブームが続いていました。県では沖繩県振興計画を実施し、農民に自力更生・勤儉貯蓄を推奨していました。

そのような状況下で、昭和天皇の即位を記念した事業の一環として、沖繩県では勤儉貯蓄についての論文・民謡・童謡の募集が行われました。民謡の部で3位（1位、2位の該当はなかった）に入選したが、「勤儉力行の奨」で応募した仲本稔氏でした。仲本氏は当時23歳の字仲座（旧具志頭村）出身者でした。

その後「汗水節」と改題され宮良長包氏により作曲されると、県民に広く知られ、歌われるようになりました。近年では汗水節に振りが付けられ、エイサーや創作舞踊などで踊られています。

本町は、仲本稔氏の生誕110周年目にあたる平成26年に「汗水節の里」宣言をし、歌詞に込められた6つの心を町ぐるみで自ら実践し、人づくり・まち興しに努めることを掲げました。

八重瀬町「汗水節の里」宣言 ※一部を抜粋

私たちは「汗水節」を育んだ八重瀬町を誇りとするとともに、ふるさとの貴重な文化遺産として継承し、地域社会の発展に寄与していきます。また、仲本稔生誕の地、八重瀬町を「汗水節の里」とし、歌詞に込められた六つ心を町ぐるみで自ら実践し、人づくり・まち興しに努めます。

「汗水節の六心」^{りくしん}

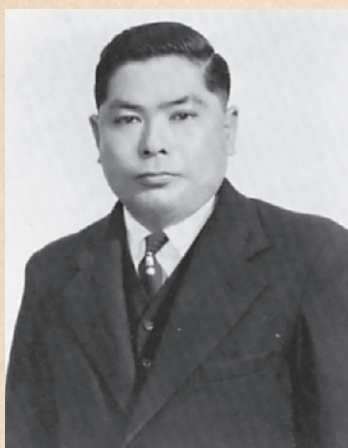
- ・勤労を尊ぶ心
- ・勤儉貯蓄の心
- ・夢と希望を育む心
- ・健康と長寿の心
- ・学問を奨励する心
- ・社会奉仕の心



具志頭汗水節保存会による集団舞踊



汗水節之碑（仲本氏の生誕80周年記念で建てられた）



作詞者 仲本 稔氏

「成し業ん終て子や子孫栄え七十坂のぼりて別りさびら」仲本氏が亡くなる4年前の1973年に作った辞世の句です。「一日に五厘の無駄もなく生き抜いた人生には何も思い残すことはない」。自ら汗水節の歌心を実践し活きた仲本氏の人柄が現れています。

「汗水節」

汗水ゆ流ら 働ららゆる人の

心うれしさや 与所の知ゆみ

一日に五十百日に五貫

守てそこねるな 昔言葉

朝夕働ららよて 積ん立てる銭や

若松の盛い年と共に

心若々と 朝夕働まば

五六十になつても 二十歳さらみ

寄ゆる年忘て 育てたるなしぐわ

手墨字向も 汎く知らし

公衆の為も 我が為ゆと思て

百勇みいさで 尽くしみしより

作詞 仲本 稔
作曲 宮良長包